南摩綱紀『追遠日録（一名下野紀行）』訳注（下）

道　坂　昭　廣

本稿は、南摩綱紀『追遠日録（一名下野紀行）』に附された詩の訳注である。『追遠日録』は、明治17（1884）年7月27日に東京を川蒸気船で出発し、佐野・唐澤山・足利を訪ね、8月2日蒸気機関車で熊谷より帰着した旅行の記録であり、漢文で綴られている。本文にあたるこの記録の訳文は、「南摩綱紀『追遠日録（一名下野紀行）』訳注（上）」と題して、『四天王寺大学紀要』第47号（2009年3月）に発表した。南摩綱紀と『追遠日録』についてはそちらで簡単に紹介したので、本稿では省略する。本稿において語注は、典拠のある言葉だけでなく、南摩が意識して用いているかどうかはさておき、中国の詩文に用例のある表現はできるだけ指摘するようにした。漢詩文が東アジア共通の文芸であり、いわゆる漢語、或いは漢語的表現が共有の言葉であったこの時期の、日本における一つの例として示すことができるのではないかと考えたからである。

附録

發東京

二州橋畔買輕舟、　　二州橋畔　軽舟を買う、
纖月微風蘆荻秋。　　纖月　微風　蘆荻の秋。
醉夢醒時天漸白、　　醉夢　醒めし時　天　漸く白く、
倏然身入下毛州。　　倏然として身は下毛州に入る。

・買軽舟＝明・范允臨「蕪陰晩眺」詩「欲買軽舟醉明月、赭山東問秣陵秋」（『輪寥館集』巻1）。　・纖月微風＝清・潘奕雋「博望駅七夕用義山韻」詩「雲鬟玉臂自今夜、纖月微風又一時」（『三松堂集詩集』巻4）。　・蘆荻秋＝元・盧琦「題補魚図」詩「白衣漁父独操舟、両岸西風蘆荻秋」（『圭峰集』巻上）。　・醉夢醒時＝宋・張炎「鳳凰台上憶吹簫」詞「醉夢醒時、却是山陰」（『山中白雲詞疏証』巻1）。　・天漸白＝明・范鳳翼「喬光禄招集如如斎即事」詩「出門天漸白、邗水欲生潮」（『范勛卿詩集』巻16）。　・倏然身入＝宋・范仲淹「定風波」詞「花花映浦無尽処、恍然身入桃源路」（『范文正公詩餘』）。また、清・董元度「説夢賦」跋「其始也、如蜃楼之成、燦然而現莫可名之状。其終也、如浮雲之散、倏然而入無可有之郷」（『舊雨草堂詩』巻4）。

両国橋のたもとで快速の舟を雇う、細い月は天上にそよ風が岸辺の蘆や荻をそよがせる秋景色。
酔って眠り目覚めれば空がだんだんと白みはじめていて、たちまちのうちに自分は下野の国に入っていた。

＊三島中州は「汽舩の迅疾、言外に隠然たり、妙」と評している。南摩のこの記録は、ジャンルを問わず文学作品に川蒸気船が登場する早い時期の作品と思われる。確かに、詩は秋の風景を詠う一方で、蒸気船の高速性を詠っており、明治の新事物の紹介という意図も込めていると思われる。
ただ、「軽舟」は、軽快な舟と共に小舟のイメージもあり、江戸以来の和船よりはるかに大型である通運丸を表現するに適切な言葉であったかどうか。また、この言葉も含め詩の描写は全体に、古典世界の雰囲気が強いように感じられる。

國府舊址（在藤岡）

當年國府那邉求、　　当年の国府　那辺に求む、
菜圃桑畦交稲疇。　　菜圃　桑畦　稲疇に交ゆ。
俯仰豈無今昔感、　　俯仰すれば豈に今昔の感無からんや、
夕陽吟斷古丘秋。　　夕陽　吟断　古丘の秋。

・当年＝唐・許渾「咸陽城東楼」詩「行人莫問当年事、故国東来渭水流」（『瀛奎律髓』巻3）。　・菜圃桑畦＝清・陳景鐘　詩題「雷峰之下如上清宮・普寧寺・浄寧院、皆古刹也。今已基址莫考矣。乾隆戊午冬、予与柳亭・鴻雪、歩迴峰之陰、並湖而西、悉菜圃桑畦、荒邱冷厝、雖有一二漁舎禅関、亦柴扉昼掩、寂若無人」（『両浙輶軒録』巻23）。　・交稲疇＝唐・張籍「祭退之」詩「北台臨稲疇、茂柳多陰柳」（『張司業集』巻7）。　・俯仰の句＝「俯仰古昔、不覚泪下沾衿」（明・劉若愚『酌中志』巻22見聞瑣事雑記）。また斎藤拙堂「三月廿三日、与梁星巖、牧贛斎、頼立斎諸子同游糺林、憶嘗庚寅夏、字星巖、贛斎游此、屈指已二十四年矣」詩「俯仰豈今昔感、今人猶是古人心」（『鉄研斎詩存』巻8）　・夕陽吟斷＝唐・韋莊「春雲」詩「王粲不知多少恨、夕陽吟断一声鍾」（『浣花集』巻六）。また、唐・李商隠「晋昌晩帰馬上贈」詩「征南予更遠、吟断望郷台」（『李義山詩集』巻下）。

当時の国府の跡はどこに求めることができようか、野菜畑や桑畑が水田の間にある風景。
時代の移り変わりを思わないでおれようか、夕陽射す古びた岡の秋景色を前に朗詠の声も途切れてしまった。

孔子神

莫是庠黌教五倫、　是れ庠黌の五倫を教うる莫きも、
至今風俗樸而淳。　今に至るも風俗　樸にして淳。
土人不識當年事、　土人は識らず当年の事、
猶喚村南孔子神。　猶お喚ぶ村南　孔子神と。

・庠黌＝韓愈・孟郊「城南聯句一百五十韻」「駆明出庠黌、鮮意竦軽暢」（『東雅堂昌黎集註』巻8）。また、「郷中有賢者、皆集在庠学」（『周礼』地官・郷大夫「三年則大比、攷其徳行道芸、而興賢者、能者」疏）。　・五倫＝「五常、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝」（『尚書』泰誓下「狎侮五常」疏）。「五倫」は明以降、使われる言葉。　・風俗樸而淳＝明・文徳翼「南康万宸垣先生八十序」「余観風気、康土厚重、樸而淳、康之人士、篤実恭謹」（『求是堂文集』巻9）。また、明・張居正「少師存斎徐相公八十寿序」「万暦以来、主聖時清、吏治廉勤、民生康阜、紀綱振粛、風俗樸淳」（『張太岳先生文集』巻7）。　・土人不識當年事＝明・趙崡「烟霞洞鄭子貞隠処」詩「野人不識当年事、笑道隣無姓鄭家」（『石墨鐫華』巻8）。

ここには学校があって人間にとって大切な五つの倫理を教えているわけではないが、現在に至るまでその風俗は純朴である。

土地の人はその当時のことを知りはしないが、それでも今もなお村の南の祠を孔子神と呼んでいる。

訪森鷗村賦贈

桂玉幾星霜、　桂玉　幾星霜、
朝經兼暮史。　朝経　暮史を兼ぬ。
學已有淵源、　学　已に淵源有り、
愧他談空理。　他の空理を談ずるを愧ず。
一朝有所感、　一朝　感ずる所有り、
決然歸田里。　決然として田里に帰る。
躬耕十年力、　躬耕　十年の力、
養成濟濟士。　養成す　済済たる士。

・桂玉＝「蘇秦曰、楚国之食貴於玉、薪貴於桂」（『戦国策』巻16楚策三）。　・幾星霜＝宋・洪皓「過封邱見熊主簿」詩「離家多歳月、去國幾星霜」（『鄱陽集』巻2）。　・朝經兼暮史＝宋・王応麟「康節先生勧学曰、二十歳之後、三十歳之前、朝経暮史、昼子夜集」（『小学紺珠』巻4芸文類・四部・四類。また『困学紀聞』巻20）。　・學已有淵源＝宋・張守「祭謝参政文」「惟公学有淵源、文有典則」（『毘陵集』巻10）。　・愧他談空理＝「直白先生、陶弘景・・・其時人皆

談空理、不習武事」(『太平広記』巻15神仙十五所収「神仙感遇伝」)。　・決然歸田里＝唐・呉融「閿郷卜居」詩「六載抽毫侍禁闈、不堪多病決然帰」(『万首唐詩絶句』巻49)。また、「上賢而釈之、遷為滎陽令、黯恥為令、称病、帰田里」(『漢書』巻50汲黯伝)。　・濟濟士＝「済済多士、文王以寧」(『詩経』大雅・文王)。

他国で苦学すること幾年か、朝に経書を読みそのまま夜に史書を読むという勉強ぶり。
その学問は既にちゃんとした基盤が完成し、他の人が空論を語るのを恥ずかしく思っていた。
ある時、考えるところがあり、きっぱりと故郷に帰った。
みずから田畑を耕すこと十年、多くのりっぱな若者を育てた。

拜唐澤神社

唐澤山高幾千尺、　唐沢山は高きこと幾千尺、
矗矗衝天聳巌石。　矗矗として天を衝き巌石を聳やかす。
絶巓有井深數仞、　絶巓にして井有り深きこと数仞、
大旱千日不曽涸。　大旱千日　曽て涸れず。

・高幾千尺＝宋・梅堯臣「石屏路」詩「峭拂直上幾千尺、下有石路莓苔青」(『宛陵集』巻26)。　・矗矗衝天＝漢・司馬相如「上林賦」「於是乎崇山矗矗、巃嵸崔巍」(『文選』巻8)。また、「(天狗星)・・・望之、如火光炎炎衝天」(『史記』巻27天官書)。

唐沢山は高さは何千尺、すっくと天を突き岩を聳え立たせている。
切り立った頂上でありながら深さ数仞もある井戸があり、大旱魃が千日続いても涸れたことがない。

維昔將軍城此巓、　維れ昔　将軍　此の巓に城(きず)き、
數萬貔虎據鎮壁。　数万の貔虎　鎮壁に拠る。
何物新皇恣鴟嚇、　何物ぞ新皇　鴟嚇を恣にし、
關左八州悉蚕食。　関左八州　悉く蚕食さる。
將軍一戰輙討平、　将軍一戦して輙ち討平せしは、
接武遠祖誅姦績。　武を接す　遠祖の姦を誅せし績に。
果見餘慶及孫子、　果して見よ余慶　孫子に及び、
將軍五世族三百。　将軍たること五世　族三百。

・貔虎＝「勗哉夫子、尚桓桓、如虎如貔、如熊如羆、于商郊」(『尚書』牧誓)。　・據鎮壁＝宋・

徐積「和倪復」詩「金城不可破、鐵壁不可奪」（『宋詩鈔』巻41）。　・恣鴟嚇＝『荘子』秋水篇の寓話に基づく。　・蚕食＝「昭王得范雎、廃穰侯、逐華陽、彊公室、杜私門、蚕食諸侯、使秦成帝業」（『史記』巻87李斯列伝）。　・討平＝「及車騎將軍皇甫嵩討平黄巾、盛称（盧）植行師方略」（『後漢書』盧植伝五十四）。　・接武遠祖＝「堂上接武、堂下布武」（『礼記』曲礼）。また、「古来辞人、異代接武」（『文心彫竜』物色篇）。　・餘慶及孫子＝「積善之家、必有余慶。積不善之家、必有余殃」（『易』坤）。

昔秀郷将軍はこの頂上に城を築き、数万の強兵が黒鉄のような壁のこの城に拠った。
何物であろうか新皇を称した者が威嚇の声を恣にして、関東八州はすべて蚕食された。
将軍がたった一戦で討ち平げたのは、姦悪な蘇我氏を誅殺した遠祖の功績を継ぐものである。
果してその余慶は子孫に及び、将軍の位を継ぐこと五世　一族は三百にも枝分かれし繁栄した。

特旨追贈正三位、　特旨もて追贈さる正三位、
新廟禋祀永奕奕。　新廟　禋祀　永く奕奕。
跪薦蘋蘩與清酌、　跪きて蘋蘩と清酌を薦め、
俯仰山河感今昔。　山河を俯仰して今昔を感ず。
綱紀辱列公冑裔、　綱紀　辱なくも公の冑裔に列し、
誓繼公志報家國。　誓いて公の志を継ぎ家国に報ぜん。
雲漠漠兮風蕭蕭、　雲は漠漠として風は蕭蕭たり、
恍然倏覺神來格。　恍然として倏ち神の來格を覚ゆ。

・追贈＝「初常少・張隆勧（公孫）述降、不従、並以憂死。帝下詔、追贈少為太常、隆為光禄勲、以礼改葬之」（『後漢書』公孫述伝三）。　・新廟の句＝「新廟奕奕、奚斯所作」（『詩経』魯頌・閟宮）。　・禋祀＝「来方禋祀、以其騂黒、与其黍稷」（『詩経』小雅・大田）。また「吾子孫其覆亡之不暇、而況能禋祀許乎」（『春秋左氏伝』隠公十一年）。　・跪薦＝宋・朱熹「山北紀行十二章章八句」詩「竦瞻徳容睟、跪薦寒流碧」（『晦菴集』巻7）。　・蘋蘩＝「苟有明信、澗谿沼沚之毛、蘋蘩薀藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公」（『春秋左氏伝』隠公三年）。　・清酌＝「凡祭宗廟之礼・・・酒曰清酌」（『礼記』曲礼下）。また韓愈「祭柳子厚文」「韓愈、謹以清酌庶羞之奠、祭于亡友柳子厚之霊」（『東雅堂昌黎集注』巻23）。　・冑裔＝「呉周之冑裔也、而棄材海浜、不与姫通」（『春秋左氏伝』昭公三十年）。　・継志＝「善教者、使人継其志」（『礼記』学記）。　・雲漠漠兮風蕭蕭＝清・王柏心「送唐子方擢守鞏昌府序」「同携清酒、祖帳晴川。風蕭蕭兮班馬鳴、雲漠漠兮驚鴻起」（『王柱堂全集』巻49）。　・神來格＝「祖考来格、虞賓在位」（『尚書』益稷）。

天皇の特別なおぼしめしで正三位が贈られた、新しく作られた廟の祭祀はこの後も長く麗しく

盛んなことであろう。

跪き粗末なお供えと清酒をお供えし、山河を見渡せば遥かな時間の経過を思わないではおれない。

私綱紀は忝なくも秀郷公の一族の末裔に列なっている、誓って公の志を継いで一族と国家の恩に報おう。

雲はもくもくと湧き風は蕭々と物寂しく、恍惚とした気分のなかでたちまちに公の霊がお出でになるのを感じた。

聞佐野常世事

馬溺遇佳客、　　馬溺　佳客に遇う、
盆梅得好莊。　　盆梅　好莊を得。
銹刀與瘦馬、　　銹刀と瘦馬と、
葵心豈意忘。　　葵心　豈に意忘れんや。

・佳客＝杜甫「雨二首」其一「佳客適万里、沈思情延佇」（『杜詩詳注』巻15）。　・葵心＝曹植「求通親親表」「若葵藿之傾葉、太陽雖不為之廻光、然終向之者、誠也。臣竊自比葵藿、若降天地之施、垂三光之明者、実在陛下」（『文選』巻37）。

馬が放尿したのがきっかけで優れた人を客として迎えることになり、梅の盆栽にちなんでよい荘園を賜った。

銹びた刀と痩せ馬であっても、主君への忠義の思いをどうして忘れることがあろうか。

窮達不變眞志士、　　窮達　変らざるは真の志士、
誰言此事屬荒唐。　　誰か言わん此の事　荒唐に属すと。
千歳猶留當時物、　　千歳　猶お留む当時の物、
正雲寺畔藥師堂。　　正雲寺畔　薬師堂。

・窮達不変＝元・謝応芳　詩題「亀巣老人謝蘭、謂之曰、夫人以倹徳立身、惟窮達不変者君子。題之拙詩。效顰亦曰、備薑桂之用云」（『亀巣稿』巻17）。　・荒唐＝韓愈「桃源図」詩「神仙有無何眇芒、桃源之説誠荒唐」（『東雅堂昌黎集注』巻3）。

窮迫や栄達で信条を変えないのが本当の志士である、この故事が事実ではないなどと誰が言うのだ。

長い年月を経てもまだその当時の品々が保存されているのだ、正雲寺のそばの薬師堂に。

訪佐野郷賦贈

岳降之神邦家傑、　岳降の神　邦家の傑、

華胄遥出自神別。　華胄　遥かに出づるは神別自りす。

（本邦氏族有神別皇別等吾系則出天御中主神故曰神別）

本邦の氏族　神別・皇別等有り、吾系は則ち天御中主神に出ず、故に神別と曰う

曩祖忠勇誅鯨鯢、　曩祖　忠勇にして　鯨鯢を誅し、

孫子百世悉發越。　孫子　百世　悉く発越たり。

・岳降之神＝「維嶽降神、生甫及申」（『詩経』大雅・崧高）。　・邦家傑＝「楽只君子、邦家之基」（『詩経』小雅・南山有台）。また、宋・呂本中「符離諸賢」詩「二三子実乃邦家傑、我来従之游」（『東萊詩集』巻1）。　・華胄＝「鎮遠王擢表雍・秦二州望族、自東徙已来、遂在戍役之例、既衣冠華胄、宜蒙優免、従之」（『晋書』巻107石季竜載記上）。　・曩祖＝晋・陸機「晋故散騎常侍陸府君誄」「本崇曩烈、堂構克栄」（『陸子竜集』巻5）。　・誅鯨鯢＝「古者明王伐不敬、取其鯨鯢而封之、以為大戮」（『春秋左氏伝』宣公十二年）。　・発越＝漢・司馬相如「上林賦」「郁郁菲菲、衆香発越」（『文選』巻8）。

高千穂に天下られた神こそ我が国の英傑、我が高貴な家柄は遠くこの神を出自とするのである。先祖は忠勇にして大悪人を誅したが、百代にも列なる子孫もみな歴史に紛々とした香気を残している。

余訪宗家拜遺物、　余　宗家を訪ね遺物を拝し、

思古感今氣鬱勃。　古を思い今に感じ気鬱勃たり。

時勢雖異道則同、　時勢　異にすと雖も道は則ち同じ、

不論江湖與魏闕。　江湖と魏闕とを論ぜず。

與君同遇聖明世、　君と同じく聖明の世に遇う、

何以能紹公餘烈。　何を以て能く公の余烈を紹がん。

・遺物＝魏・曹丕「悼夭賦」「感遺物之如故、痛爾身之独亡」（『藝文類聚』巻34人部十八哀傷）。　・思古感今＝漢・劉歆「遂初賦序」「後徙五原太守、志意不得。経歴故晋之域、感今思古、遂作斯賦」（『藝文類聚』巻27人部十一行旅行）。また、白居易「裴五」詩「莫怪相逢無笑語、感今思旧戟門前」（『白氏長慶集』巻15）。　・道則同＝宋・韓琦「次韻答磁州王復都官」詩「本邦為守獲隣封、民政雖殊道則同」（（『安陽集』巻8）。　・江湖與魏闕＝李白「金郷送韋八之西京」詩注「（宋）楊斉賢曰、…太白此詩、因別友而動懐君之思、可謂身在江湖、心存魏闕者矣」（『李太白集分類補註』巻16）。　・遇聖明世＝晋・張華「晋凱歌・命將出征歌」「今在聖明世、寇虐動四垠」（『古詩紀』巻50）。　・餘烈＝「由此知越世世為公侯矣。蓋禹之余烈也」（『史記』巻114東越列伝賛）。

私は宗家を訪問し伝来の品々を拝見し、昔を思い今に感じふつふつと気持ちが高ぶってきた。

時勢は異なっていても踏み行うべき道は同じであり、在野にあろうと朝廷にあろうと関係はない。

君と同じく聖明な天皇の御代に生まれ合わせた、どのようにして身に流れる秀郷公の忠烈を引き継ごうか。

足利學校

曽開國學化州郷、　曽て国学を開き州郷を化す、
聖像依然儼在堂。　聖像　依然　儼として堂に在り。
特旨賜金新憲典、　特旨もて　金を賜い憲典を新たにす、
遺編滿笥舊彝章。　遺編　笥に滿つは　旧き彝章。
金聲玉振德無極、　金声玉振　徳　極り無く、
春誦秋絃教有方。　春に誦し秋に絃し　教に方有り。
待見儀型皆復古、　待見　儀型　皆な復古、
養成忠孝立綱常。　忠孝を養成して綱常を立つ。

・開國學＝「南唐跨有江淮、鳩集典墳、特置学官、浜秦淮、開国学、其徒各不下数百。所統州県、往往有学」（馬令『南唐書』巻29帰明伝下第一九）。　・聖像依然＝清・朱彝尊「天平山謁范文正公祠」詩「范公祠屋此山中、石筍抽萌万笏同。遺像依然窮塞主、義田不改旧家風」（『曝書亭集』巻22）。　・儼在堂＝明・童冀「過安慶謁余忠宣公祠」詩「翔我嘗拜公淛水傍、繡衣玉節何煌煌。今公遺像儼在堂、九原不作涕四滂」（『尚絅齋集』巻3）。　・憲典＝「掾清識年当、明于憲典、勉恤之哉」（『三国志』巻24魏書・高柔伝）。　・遺編滿笥＝明・程敏政「贈李士敬錦衣進署千戸」詩「太師勲徳天下聞、遺編滿架留香芸」（『篁墩文集』巻82）。　・舊彝章＝明・文徴明「観駕幸文華聴講」詩「千載明良真際会、九朝文物旧彝章」（『甫田集』巻10）。　・金聲玉振＝「孔子之謂集大成、集大成也者、金声而玉振之也。金声也者、始條理也、玉振之也者、終條理也」（『孟子』万章下）。また、「唯天子建中和之極、兼総條貫、金声玉振」（『漢書』巻58児寛伝）。　・春誦秋絃＝「春誦夏弦、大師詔之瞽宗。秋学礼、執礼者詔之。冬読書、典書者詔之。礼在瞽宗、書在上庠」（『礼記』文王世子）。　・有方＝「有人於此、其徳天殺。与之無方、則危吾国、与之為有方、則危吾身」（『荘子』人間世）。　・待見＝「賓客待見而不敢去、車騎交錯而不敢進」（『後漢書』仲長統伝三十九）。　・儀型＝蘇軾「坤成節集英殿宴教坊詞・小児致語」「惟流伝於歌舞、庶髣髴其儀刑」（『東坡全集』巻115）。　・復古＝「車攻、宣王復古也」（『詩経』小雅・車攻序）。　・立綱常＝元・劉麟瑞「丞相信国公文公天祥」詩「六籍一時光日月、孤忠千古立綱常」（『元詩選二集』巻3）。

昔　国学を開いてこの地域を教化した、孔子様の像は変わることなく厳めしく教堂にある。

天皇の特別な思し召しで下賜金を得て制度を新たに整えたが、伝えられてきた書物は書棚に一杯　すべて人の道を説いた昔の典籍。

智徳全て備わった儒学の徳は極まりないほど広大で、春には経典を朗誦し秋には楽を学びと教育にはきちんとした規則がある。

弟子の身ごなしや儀典はすべて古代を再現したものであり、忠孝の徳を養成し人として遵守すべきあり方が定められている。

鑁阿寺

欲借禅榻避炎塵、　禅榻を借り炎塵を避けんと欲す、
一椀苦茶爽心神。　一椀の苦茶　心神を爽やかにす。
寺僧為余陳遺物、　寺僧　余の為に遺物を陳ぬ、
古色蒼然悉奇珍。　古色蒼然として悉く奇珍。

・借禅榻＝元・薩都剌「宿竜龍潭寺」詩「倦遊借禪榻、客意稍従容」（『元詩選初集』巻34）。　・炎塵＝宋・呂本中「寄温州希用上人」詩「炎塵満天地、懐子邈湖江」（『東萊詩集』巻11）。　・苦茶＝「今呼早采者為茶、晩取者為茗、一名荈、蜀人名之苦茶。」（『爾雅』釈木「槚、苦茶」郭璞注）。　・爽心神＝宋・楊万里「和厳州添倅趙彦先寄四絶句」其一「不見王孫今九春、新詞麗曲爽心神」（『誠斎集』巻22）。　・古色蒼然＝「隷書自中郎而下、世不乏人、然東京之筆、古色蒼然」（『五雑俎』巻7　人部）　・珍奇＝「遣人通越繇王閩侯、遺以錦帛奇珍。繇王閩侯亦遺建荃・葛・珠璣・犀甲・翠羽・蝯熊奇獣、数通使往来、約有急相助」（『漢書』巻53景十三王・江都易王非伝）。また、「自経変故以来、凡天府奇珍異宝、流散人間、泯泯無聞者、何可勝数」（『虞初新誌』巻16所収、詹鍾玉「記古鉄条」）。

座禅に使う椅子を借りて世俗の暑さと埃を避けようとする、出された一椀の苦いお茶に心が爽やかになった。

僧侶は私のために寺に伝わる宝物を並べてくれた、長い年月に渉って伝えられてきたことがありありとわかる　すべて珍しいものである。

憶昔王綱解紐日、　憶う昔　王綱　解紐の日、
武臣跋扈事戰伐。　武臣跋扈し　戦伐を事とす。
冠履順逆不曽知、　冠履　順逆　曽て知らず、
却祈冥福謾佞佛。　却て冥福を祈り謾に仏に佞す。

・王綱解紐＝「由是九州絶貫、王綱解紐、四海蕭條。非復漢有太祖、承運神武、応期征討」（『晋書』

巻56孫楚伝)。　・武臣＝「君子聴鐘声、則思武臣」(『礼記』楽記)。　・跋扈＝「往年赤眉跋扈長安、吾策其無穀必東、果来帰降」(『後漢書』朱浮伝二十三)。　・事戰伐＝宋・蘇轍「進策五道・民政上・第四道」「秦孝公欲并海内、商君為之唱謀、使秦人莫不執兵以事戦伐、而不得反顧」(『欒城応詔集』巻9)。　・不曽知＝宋・黄庭堅「奕棊二首呈任公漸」詩其二「誰為吾徒猶愛日、参横月落不曽知」(『山谷外集』巻7)。　・冠履順逆＝「冠履倒易、陵谷代処、従小人之邪意、順無知之私欲、不念板蕩之作、虺蜴之誡、殆哉之危、莫過於今」(『後漢書』楊賜伝四十四)。また、「循其祖徳、弁其順逆、推育賢人、讒匿不作」(『管子』四称)。　・祈冥福謾侫佛＝元・呉澄「題遺廖生」「若其刻木象、母以附父、冗施経侫佛以祈冥福、則礼之所否、理之所無不為可也」(『呉文正集』巻61)。

思い巡らせば、朝廷の政治がゆるんでいた時代、武士たちが我が物顔で戦いをもっぱらにしていた。

下克上の世の中で正義も悪も何も解ろうともせず、あの世の幸福を願ってみだりに仏に媚びていたのである。

聞説足利氏曽創此寺、	聞説らく足利氏　曽て此の寺を創り、
内外奇品争贈寄。	内外の奇品　争いて贈寄す。
幸免兵馬與祝融、	幸いに兵馬と祝融を免るるは、
有似鬼神護且秘。	鬼神の護り且つ秘するに似たる有り。

・聞説＝唐・孟浩然「洛中訪袁拾遺不遇」詩「聞説梅花早、如何此地春」(『孟浩然集』巻4)。　・奇品＝宋・司馬光「又和安国寺及諸園賞牡丹」詩「洛邑牡丹天下最、西南土沃得春多。一城奇品推安国、四面名園接月波」(『伝家集』巻11)。　・幸免＝「子曰、人之生也直、罔之生也、幸而免」(『論語』雍也)。　・兵馬＝唐・杜甫「出郭」詩「故国猶兵馬、他郷亦鼓鼙」(『杜詩詳註』巻9)。　・祝融＝唐・張説「蒲津橋賛」「飛廉煽炭、祝融理炉」(『張燕公集』巻12)。　・有似＝韓愈「贈崔立之評事」詩「可憐無益費精神、有似黄金擲虚牝」(『東雅堂昌黎集註』巻4)。　・鬼神護且秘＝宋・王十朋「復安静堂旧額」「因知文字乃至宝、一時之厄庸何傷。石鼓文有鬼神護、淮西碑並日月光。」(『梅渓集』巻20)。また、宋・文天祥「又贈朱斗南序」「而天地宝之不常出、鬼神秘之、不使世人可測知也」(『文山集』巻13)。

伝えられているところでは足利氏が昔この寺を創建し、国内外の珍しい品が競って寄進されたとか。

幸いにも戦禍と火災を免れたのは、神が守りまた隠しておいてくれたかのようだ。

嗚呼觀物思昔又思今、	ああ　物を観　昔を思い又た今を思う、

興亡榮枯感自深。　　興亡栄枯　感　自ら深し。
十五代之將軍皆枯骨、　　十五代の将軍皆な枯骨、
不及依然猶存古禪龕。　　及ばず　依然として猶お古禅龕の存するに。

・興亡榮枯＝「興亡盛衰、栄枯代謝、是与物推移者也」（『三略直解』巻上）。　・感自深＝宋・劉敞「秋意四首」其二「時変感自深、豈伊恨越郷」（『公是集』巻10）。　・枯骨＝「袁公路豈憂国忘家者邪、冢中枯骨、何足介意。」（『三国志』巻32蜀書・先主伝）。　・禪龕＝唐・杜甫「謁文公上方」詩「長者自布金、禅龕自晏如」（『杜詩詳注』巻9）。

ああこの寺の秘宝を見、古今のことを思えば、栄枯盛衰について深く考えさせられる。
足利氏の十五代の将軍たちはみな死んで骨になってしまい、変わることなくなお伝わる禅室に及ばない。

　　滊車自熊谷歸東京

滊笛轟地一聲起、　　汽笛　地を轟して一声を起し、
黒煙漲天馳快駛　　黒煙　天に漲り馳ることを快駛たり
村落横走看不定、　　村落　横ざまに走りて看定まらず、
疾風颼颼掠雙耳。　　疾風　颼颼として双耳を掠む。
豈啻縮地費長房、　　豈に啻だ地を縮むは費長房のみならんや、
一瞬飛過數十里。　　一瞬にして飛過す数十里。

・轟地＝宋・鄧肅「靖康迎駕行」「夜起火光迷鳳闕、鉦鼓砰轟地欲裂」（『栟櫚集』巻4）。　・漲天＝「頃之、煙炎漲天、人馬焼溺、死者甚衆」（『三国志』巻54呉書・周瑜伝）。　・村落＝「入魏郡界、村落斉整如一」（『三国志』巻16魏書・鄭渾伝）。　・横走＝宋・陸游「竜洞」詩「峭崖磨天如立壁、枏根横走松倒植」（『剣南詩稾』巻6）。　・看不定＝唐・白居易「繚綾　念女工之労也」「異彩奇文相隠映、転側看花看不定。昭陽舞人恩正深、春衣一対直千金」（『白氏長慶集』巻4）。　・疾風颼颼＝明・袁中道「従夷陵峰宝山至玉泉道中示同遊羅玉検詩」其二「疾風吹草鳴、颼颼如有物」（『珂雪斎集』前集巻3）。　・掠雙耳＝明・羅玘「送賈生帰山東序」「壬子暮春中吉、有偉一生、款門願逞其芸、其入空、裊裊疾風掠耳、驚電燿目、兵貴鋭、先以稍、隨以剣也」（『圭峰集』巻9）。　・費長房＝「列異伝曰、費長房、又能縮地脈」。（『藝文類聚』巻72食物部・鮓）。　・一瞬＝明・王世貞「和徐荊州覆水歌」「青山百畳過一瞬、飛帆逐天天欲尽」（『弇州四部稿』巻19）。

汽笛は地を揺るがして起こり、黒煙は天に漲り汽車は軽快に走る。
村々は横ざまに走りすぎてしっかりと見定められず、わき起こる風はびゅうびゅうと両方の耳

をかすめる。

距離を縮めることができたのは費長房だけなどということがあろうか、一瞬のうちに数十里が飛ぶように過ぎた。

＊明治5年、新橋横浜間に初めて鉄道が敷設された。南摩が乗った熊谷から東京（上野）の路線は明治16（1883）年7月に開業したばかりであった。また、第一句の表現は、明治33（1900）年に作られた「鉄道唱歌」の歌い出しに似る。偶然の一致であろうか。

追記

前稿発表後、物流博物館の玉井幹司氏より、南摩が乗船したと思われる通運丸についてお教えをいただくことができた。特に両国出船時刻について、前稿では、午後3時としたが、玉井氏のご指摘に従い、「午後2時30分頃」と訂正する。また、唐澤山神社宮司佐野正行氏より『唐澤山神社創建誌』など、貴重な資料をご送付いただいた。ここに記して、両氏に感謝を申し上げる。